

人物で語る 日本デンマーク

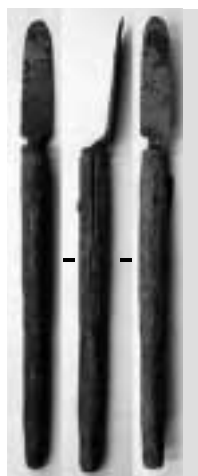
③0

近藤與治右工門 Ⅱ

池浦では、明治用水の北側に高い平地が広がり、開拓農民は、このやせ地でヒエやアワを栽培して食う分を確保し、南の低い土地で地主に納める米を作った。與治右工門は、皆がヒエなどを作る畑で高収入のユリとウドを作ったが、やがて、水田でも畝を高く積みれば良質のウドができることを知った。故郷のやり方を受け継ぐだけでなく、新しい分野を切り開いていったのだった。

写真は、與治右工門が使ったウド掘りの農具である。深く地中に埋まったウドの茎を傷つけることなく掘り出す道具で、村では彼が工夫して鍛冶屋に作らせたものと伝えている。

彼のウドは格別うまいとの評判が立ち、市



ウドこんさが使った
ウド掘り具(122cm)

場でも一目置かれるようになった。販路も東京・大阪へと広がり、汽車で仙台へも送った。村では、彼のことをウドの近藤という意味で「ウドこんさ」と呼んだ。

ウドこんさの意欲は、とどまるところを知らず、民家の前(南)の水田のうち、とくに「シケル」ところ(湿気の高いところの意)を選んで連田を作ってみた。レンコンである。ところがこれは、胸まで泥田につかる重労働で、他人を雇う與治右工門の経営には適さなかった。

彼は、経営拡張のために耕地を買った。碧海台地では、ようやく稲が取れるまでになったころ、農地に租税がかかるようになり、負担しきれない農民は田んぼを手放し始めた。手放す農地に値がつかず、酒を一升つけて渡したという話があるほどである。そのころ與治右工門は農地を買っていった。

彼は土地を買うのに、手持ちの金は使わず、借りた金で買い、利子はウドの儲けで払う、と言っていたという。また、日清戦争が始まると、物価が上がることを予測して、近所の農民に話していたともいう。このため、村びとから「ウドこんさは金勘定のできる百姓」と評された。

彼は体格がよく大柄な人物だったが、やることはきめ細かく、几帳面で、物事を計画的に手際よくすすめた。家庭内では威厳があり、孫にとっては近寄りがたい祖父だったが、村

では、話の分かる人と知られていた。

與治右工門の気質は息子や孫が受け継いだ。息子の秀三郎はウド作りの名人になり、昭和一桁のころ、ウドだけでも三町歩も作り、貸し付ける耕地にも「段取り」を指示する「番頭」がいた。この役は篠目の野村が受け持った。秀三郎は、農業経営だけでなく、一九一二年(明治四五年)から一六年(大正五年)まで町議会議員を務めている。新開村から選ばれて出たことは注目される。

孫の康美が東京で事業を興すのは與治右工門の商才を継ぐものといえるだろう。その弟の稲雄は昭和前半から戦後にかけて、農業実行組合の役員を務めるなど、農村のリーダーとして活躍している。

一族は金を握る農業を実現し、農地解放の時点では三〇町歩持っていたといい、一部は県立農業試験場に寄付している。「番頭」を持つ点からみても、一種の大農経営を目指していたといえるだろう。これは碧海のほかの農家とは違う点だが、その暮らしぶりは決して贅沢をせず、着る物は周りの農民と同じものを着て、朝早くから夜遅くまで仕事をした。

日本デンマーク碧海(安城)が多角的経営や金を握る農業に成長したのは、指導者の指導によるだけでなく、與治右工門のような農民が知恵を絞り、トライ・アンド・エラーを繰り返して生み出したものでもあった。

文 天野暢保